

学習材開発の理論と方法

—Kolbの経験学習理論が示唆するもの—

2011年10月28日(金)

M115500 渡邊巧

A414

発表構成

- I. RQの設定
- II. コルブの経験学習理論とは？
- III. 学習材へ示唆するもの

I. RQの設定

中村・渡邊共通RQ：
学習材開発をどのような理論と方法で行うか。

RQ：学習材開発に、Kolbの経験学習理論から
どのような示唆を得ることができるか？

↑
SQ1：kolbの経験学習理論とはどのようなものか？

SQ2：kolbの経験学習理論が示唆するものは何か？

Ⅱ. Kolbの経験学習理論とは？

本章では主に山川肖美論文(2004)を紹介することによってkolbの経験学習理論を説明する。

Kolbの経験学習論(experiential learning theory)

→サイクリックで継続的な学び直し

(概念などの再形成・修正)のプロセス

①経験学習サイクルモデル

A. 学習サイクル論 B. 学習スタイル論

②経験学習プロセスモデル

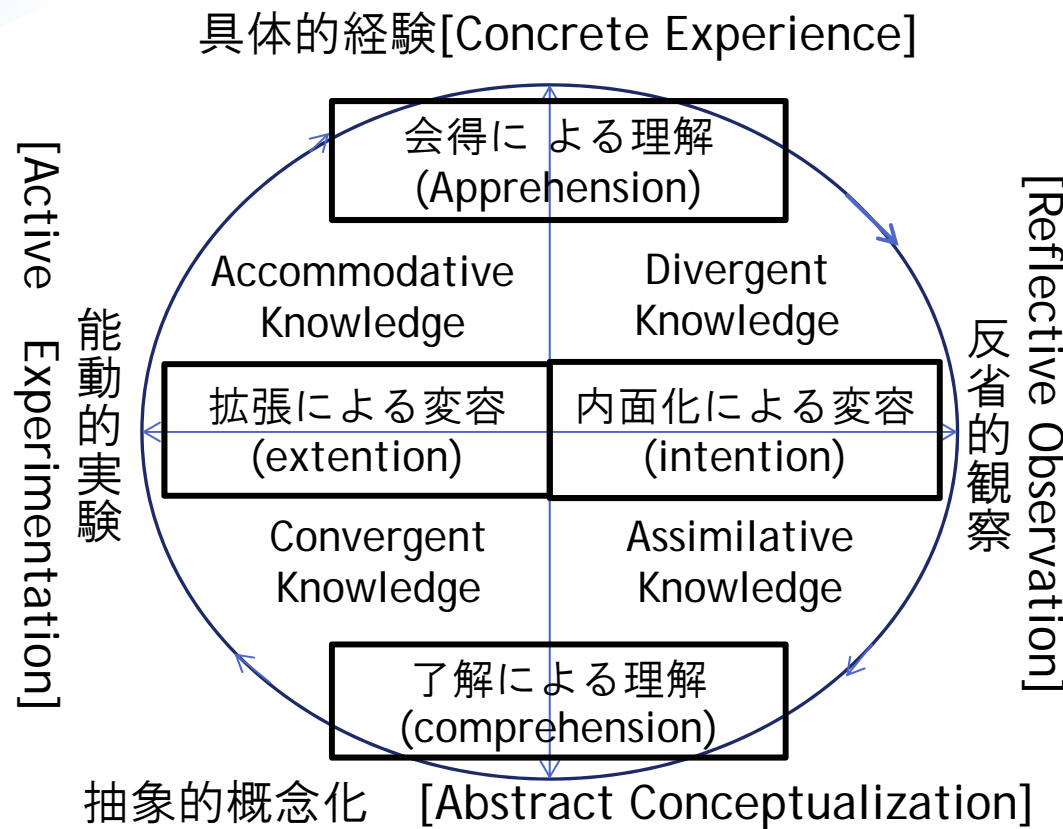
A. 学習サイクル論 B. 学習スタイル論

+

C. 生涯発達に関する学習論

① 経験学習サイクルモデル

A・B



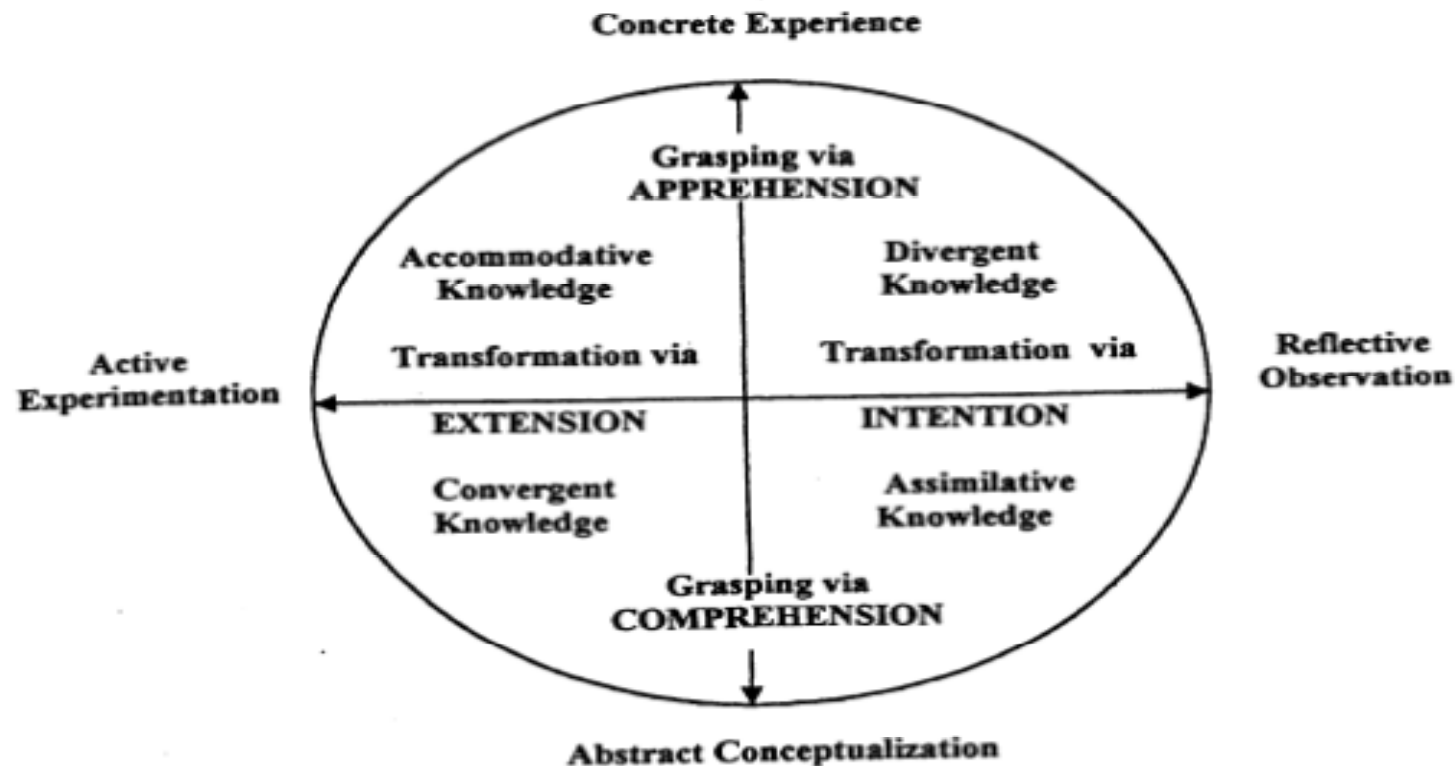
参考
p146 l13-16

山川(2004)より引用

Kolb, Baker, Jensen(2002)を参考に補足・修正

① 経験学習サイクルモデル

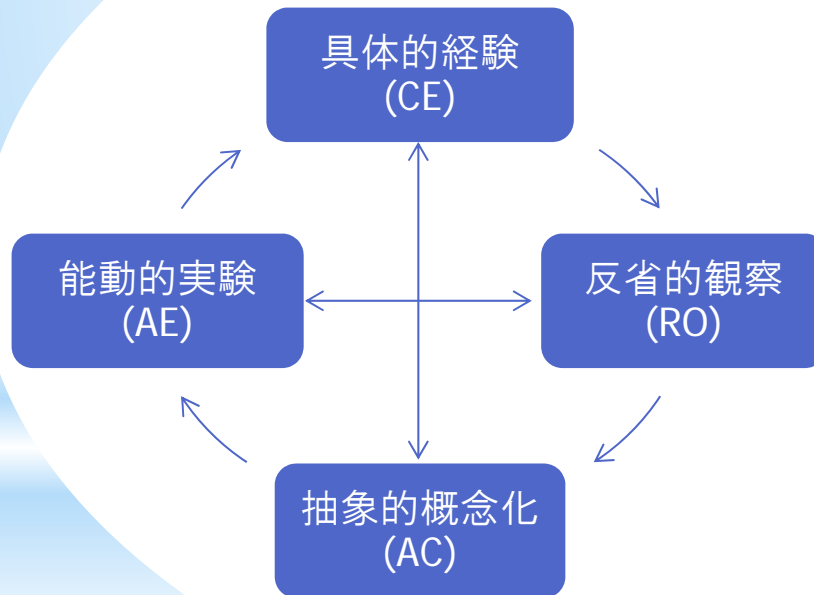
Figure 4.1
The Experiential Learning Cycle of Development



Source: From *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development* (p. 141), by D. A. Kolb, 1984, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

A. 経験学習サイクル論 pp149-151

- ・ 4つの学習モード 具体的経験(CE) 反省的観察(RO)
抽象的概念化(AC) 能動的実験(AE)



山川(2004)より引用

- ・ 理想的な学習はCE→RO→AC→AEとサイクリックな道筋をたどる。
→前者が後者の基礎になる。
- ・ 二項対立的な4つの学習モードを1つの学習プロセスに組み込んで成立する。
→対極にあるものが、サイクルの原動力になる。

Ex. 教育実習の事中・事後指導等に認められる観察や反省と、実習との連動性に認められる教育効果

二項対立的な4つの学習モードとは？

pp150-151

- ・ 第1の軸：具体的経験と抽象的概念化を結ぶ軸
「理解 prehension」の次元
 - ① 直接経験に関連する「会得 (apprehension)」
補足：会得とは、言葉で如実に表せないプロセス
 - ② 概念的な説明等に関連する「了解 (comprehension)」
- ・ 第2の軸：反省的観察と能動的実験を結ぶ軸
「変容 transformation」の次元
経験を深めたりそれを表出したりすることに関連する二つのことなるかつ反対のプロセス
 - ① 反省的観察と結びつく「内面化 (intention)」
 - ② 能動的観察と結びつく「拡張 (extention)」

B. 学習スタイル論 pp152-155

学習スタイル論は、学習サイクル論を基盤として発展したものである。したがって、サイクルの中に設定される二組の対立的な学習モード(CEとAC／ROとAE)の組み合わせによって決まる。

参考

pp153 -154

・ 学習スタイルの4パターン

「拡散的学習者」：具体的経験と反省的観察

「同化的学習者」：反省的学習と抽象的概念化

「収束的学習者」：抽象的概念化と能動的実験

「適応的学習者」：能動的実験と具体的経験

学習スタイル論の意味することは何か？

—Kolbの学習に関する立場— pp154-155

- ①学習には両極の能力が必要だと考えている。
- ②4つの学習スタイルに優劣をつけていない。
- ③学習者の置かれた社会的文脈に配慮している。
→学習場面次第で学習スタイルは変化する可能性を有している。

学習スタイル論は、コルブによる学習スタイル目録へ繋がる山川pp162-166でその具体的内容は、説明されている。

② 経験学習プロセスモデル

A・B・C

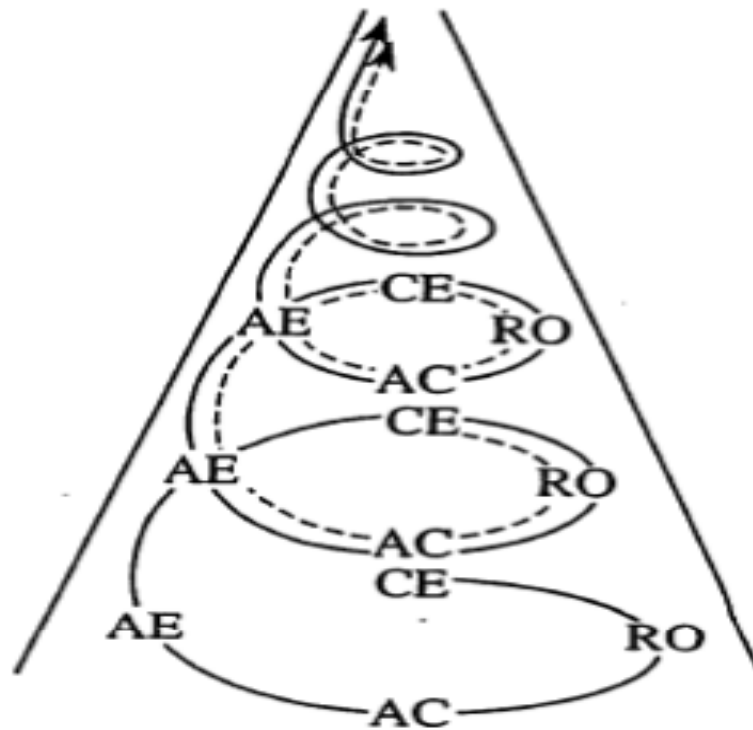


図2 経験学習プロセスモデル
[山川 一九九四, 182]

山川(2004)より引用

C. 生涯発達に関する学習論

山川(1994)をもとに

ここでいう「発達段階とは、経験を基盤とした学習をおこなうことによって移行が可能なもの」

生涯発達の3段階 : 「習得」 → 「個別化」 → 「統合」

習得

- 誕生から青年期 → 基礎学習力や認知構造の習得
- 環境に埋め込まれている (習得後期には次第に自己が分化を始める)

個別化

- 成人初期からキャリア中期
- 環境が個人の特質を変容・環境を選択

統合

- 習得・個別化の上に存在
- 環境にあわせて自己を変容・環境を変革

理念モデルとしてkoldの学習サイクルを 実践に活用する際の留意点

pp160-162

山川の指摘する留意すべき点

- ①その実践が生起する文化的社会的状況に配慮した言葉の置換が必要である。
- ②他者や環境との関係を観点として加える必要がある。
- ③無意図的な経験からの学びはコルブのモデルでは描出できない。

Ⅲ. 学習材へ示唆するもの

経験学習サイクルモデルと経験学習プロセスモデルから、学習材開発の理論と方法への示唆が得られる。

- ・ 学習サイクルを学習材へ明示的に組み込む

→各見開きに“ねらい”を示す

→見開きの構成・配置

(左頁でCE→R0→AC / 右頁でAC→AE→CE)

→各単元の構成

(1節：CE→R0 2節：R0→AC 3節：AC→AE)

AE→CEの段階は、教科外も可能

- ・ 獲得した概念等に修正(学び直し)を保障する。
 - 単元の最後に、今回の授業全体を広く経験と捉え、そこで獲得した概念を反省的観察(省察)させる設問を入れる。

参考文献

後小路(山川)肖美「コルブの経験学習論に関する研究(Ⅰ)ー経験学習サイクル論を

中心としてー」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第39巻、第1部、1993年、pp359-364。

後小路(山川)肖美「コルブの経験学習論におけるライフサイクル的視点ー経験学習サイクルとライフサイクルとの接点を求めてー」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第40巻、第1部、1994年、pp352-357。

山川肖美「コルブ学習スタイル論の研究」『広島大学教育学部紀要』第一部(教育学)第46号、1997年、pp109-117。

山川肖美「第6章 経験学習ーD・A・コルブの理論をめぐって」『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社、2004年、pp141-pp169。

David A.Kolb,Ann C.Baker,and Patricia j.Jensen "Conversation as Experiential Learnig" *Conversational learning: an experiential approach to knowledge creation*,Quorum,2002,pp51-66.

草原和博「地理教科書ー「地域」に関する概念探求・活用支援型ー」『学習材としての社会科教科書の効果的使用法に関する調査研究』、教科書研究センター、2011年。